

五月八日(月)

授業中の内職も順調に進み、授業そのものも卒なくこなした。あとは仕上がったデータのアップロードと、Stackでの共有ができれば一つ片付く。まだ時間には余裕があるし、帰宅後にゆっくりやろうと思ったのに、あと少しで家というところで、上坂さんに捕まった。

先々週は帰り際に捕まってしまったから、ちよっぴり警戒して帰ってきたのに、茨高すぐの古びた本屋の前でばったり出会った。自転車でそのまま走り去っても良かったのに、なぜか気が引けて自宅の方まで一緒に歩いてきてしまった。

で、なぜかそのままアレよアレよと、部屋の中に押し入られてしまった。先々週も取り巻きっぽい青柳さん、鈴木さんとともに家の前までやってきて、彼女だけ僕の部屋まで着いてきている。一人暮らしの狭い部屋に、二人つきりというのは落ち着かない。

彼女は「ちよつと暑いね」というと、自分の鞆を置き、財布だけ持ってどこかへ行ってしまった。一人で困惑していても仕方ないし、とりあえず手を洗い、机の前まで行ってMacを立ち上げる。Stackで作業に関して連絡をしていると、上坂さんがビニール袋を下げて戻ってきた。

「おおい、哲朗くん」

台所の方からドアを開け、可愛らしい顔を覗かせた。

「あ、ごめんなさい。お仕事申中だった？」

僕は「いや、大丈夫だよ」と答えつつ、部屋の中を極力見せないように台所へ移動した。後ろ手に扉を閉めるが、台所の狭い空間に二人でいる方が緊張するな判断を誤ったか。

上坂さんは僕のことなどさして気にかける様子もなく、コンビニで買ってきたドリンク、お酒を冷蔵庫に詰め込んでいく。残った二本のうち一本を僕に差し出し、自分はそのまま手元の缶を空けて口をつけた。狭い台所で立ったまま、極々喉を鳴らしながら豪快にビールを飲んでいく。

さつきよりちよつと赤くなつた顔で、僕の顔を見上げる。

「あれ、飲まないの？」

「ああ、うん。まだ、仕事があるから」

胸ポケットのスマホも震えて教えてくれる。もう少ししたら、次の動画について打ち合わせをするために、みいちゃんがやってくる。

「私の酒は飲めないんだ」

彼女はビールを片手に、僕の方へ身体をグッと寄せてくる。狭い台所では後退りのしようもない。暖かくて柔らかいものが押しつけられ、生理的な怒張が下腹部で存在感を主張している。

「そ、そういうのは止めようって約束したじゃないか」

「ああ。お友達のままです。そういうのはしちゃダメなの？」

彼女は舐めるような目付きで、吐息がかかりそうな近さで見つめてくる。僕は拳をグッと握りしめ、血と意識を必死に拡散させる。永遠にも感じられる数秒間、ジツと硬直していると、僕にかけられていた体重がフツと消えた。熱いぐらいの熱もスツと遠のく。

「冗談、冗談」

上坂さんはケラケラ笑って、手に持ったままだったビールに口をつけた。

「そんなにあの子が大事なんだ。立派だけど、ツマンナイのね」

彼女はビールの残りをグッと飲み干すと、中を適当に洗ってから分別してある袋に投げ入れた。自分の鞆を持って、「じゃあ、帰る」と言った。

「ああ、どうも」

上坂さんはドアを開けると、扉の向こうで誰かとしやべっている。彼女は僕に「じゃあね」と笑顔で手を振って、そのまま靴音を鳴らしながら遠ざかっていった。入れ替わりに玄関に姿を現したのは、みいちゃん。

台所に残っているコンビニの袋に、未開封の缶ビール。そこらへんに漂っている気がする、ちよつぴり蒸し暑そうな空気を、一刻も早く外に出したい。みいちゃんは険しい表情のまま、玄関の中に一歩入って後ろ手にゆっくりと扉を閉めた。

初出 令和三年五月一四日 ノベルアップ+にて公開